

中世女流日記文学の技法

——源氏式場面転換法について——

位 藤 邦 生

はじめに

「とはすがたり」卷二の中、「さるほどに、両院、御仲心よからぬこと、悪しく東さまに思ひ参らせたるといふこと聞えて、この御所へ新院御幸あるべしと申さる」という書き出しで、龜山院の後深草院御所訪問を記した条りがある。迎える後深草院方でも、いろいろと気をつかつて、饗応の手順などを、前撰政近衛兼平に相談していた。接待の女房は二条と決まった。

御幸なりぬるに、御座を対座に設けたりしを、新院御覧せられ、前院の御とき定めおかれしに、御座の設けやうわろし」とて、長押しの下へおろさるるところに、あるじの院出でさせ給ひて、「朱雀院の行幸には、あるじの座を対座にこそなされしに、今日の出御には御座をおろさるる、異様に侍る」と申されしこそ、「優にきこゆ」など、人々申し侍しか。

文中の「朱雀院の行幸には」云々の箇所を、諸注釈書、「源氏物語」藤裏葉の巻を踏まえた物言いであると指摘している。念のため「源氏物語」の本文を引いておこう。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛

りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへわたりおはしますべければ、世にめづらしうありがたきことにて、世人も心おどろかす。あるじの院がたも、御心を尽くし、目もあやなる御心まうけをせさせたまふ。(中略)御座二つよそひて、主人の御座は下れるを、宣旨ありてなほさせたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ、限りあるるやゐやしさを尽くして見せさせたまつりたまはぬことをなむおぼしける。

「とはすがたり」の記述は、「増鏡」老の波」にもほぼ同じ文章で引用されており、そこでは、

本院出で給ひて、「朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに、今日の御幸には、御座をおろさる、いとことやうに侍り」など、聞え給ふほど、いとおもしろし。

となっている。「いとおもしろし」は、これが「源氏物語」を踏まえた物言いであることを了解しての、語り手の評言だが、「とはすがたり」では、「優にきこゆ」と褒めあったのは、その場に控えていた女房たちであった。当時の「源氏物語」享受のさまを、右の挿話はよく示しているよう。

「中務内侍日記」の場合

「中務内侍日記」の冒頭部分を、岩佐美代子氏校注の新古典文学大系本で引くことにする。

いたづらに明かし暮す春秋は、たゞ羊の歩みなる心地して、末の露、本の葉に後れ先立つためしのはかなき世を、かつ思ひながら、得脱の縁にはす、まず、みな生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。

たゞかゝる世のそぞろごとのみ心にしみて忘れがたき中にも、弘安三年、伏見殿の御儀法とて、院の御方は御留守なりしに、十五夜の月も雪うち散りて、風も冷やかなる枯野の気色、物あはれなれど、同じ心に見る人もなし。ひとり眺めんもすきくしかりぬべければ、入て臥しぬるに、春宮御方、釣殿に出でさせおはします。御供、左衛門督の殿、内侍殿、男には左中将ばかり参る。宰相殿・宮内、三人寝ぬるを、「御所になりぬる」とてあれば、みな起きて参る。

すさまじき物とかや言ひふるすなる、師走の月夜なれど、宮の中はみな白妙に見えわたりて、木々の梢は花かと思ゆ。池の鏡も戯れたるに、枯蘆のはかなくしほれ伏したる程、よろづに見所あり。音なく静まりたるに、たえく岩に洩る、水の音ばかりして、軒端の松のみぞつれなく見ゆる。

権大夫、祇候したる程なるに、御使あり。「常磐井殿の御参り」とばかり答へて、局には小さき童ばかりぞある。「いと念なく、初雪の心地して」など申。

女院の御方も御留守なり。御壺御覧せらる。軒ちかく一むら生

ひたる呉竹の雪折したるも、なべて枯れぬる草よりもはかなく、よろづに気近き様に見所そひてぞ侍。また女房の局ども、いまだ寝ぬ所もあり。いと艶だちておかしき事ども多し。

なを立ちかへり、ありつる方を御覧せらるれば、少し暗れつる空もまたかきくらし、風もはげしく冴えたるに、やもめ鳥の一声も、あはれをそへてぞ覚ゆる。

ながめわび心も空にかきくれて降る白雪にかすむ月影うきふしを思ひ乱れてはかなきは汀の蘆の雪の下折

かくて入らせ給ひぬれば、御留守の御所に寝ぬれども、しばしは猶端を開けて、暗れ曇る空をながめて、何となく物語どもするに、時うつり鳥もしばく鳴くに、またあはれを添ふる鐘の音も枕にちかき心地して、いとあはれに物悲し。

我ならで鳥もなきけり音をそへて明けゆく鐘の絶ゆるひびきにたゞ心の中ばかり、つゞかぬ事のみ案ぜらる、も、我ながらおかし。

長々とした引用になつたが、右の条をまず分析してみた。

岩佐氏は「たゞ羊の歩みなる心地して」の箇所に、「死に近づいて行く道程。猶如牽羊詣彼屠所。漸漸近死無所逃避」(大乘本生心地観経)、「羊の歩みよりも程なき心地す」(源氏物語・浮舟)の注を加えられた。また引用の末尾「我ならで」の歌について、従来、群書類従本によつて下句が「明けゆく鐘のさゆるひびきに」と説かれていたところを、より善本たる彰考館蔵本の本文「絶ゆるひびきに」をもって解され、その彰考館本を底本とする新古典文学大系本では、

「私だけでなく、鶏も鳴きましたよ。声をあわせて。夜明けを知らせる鐘の音の、今しも絶えようとする響の悲しさに。源氏物語の浮

舟も、こういう時にあの「鐘のおとの絶ゆる響きに音をそへて我が世つきぬと君に伝へよ」の歌を詠んだのでしよう」と、まことに的確な注を加えられた。

「羊の歩み」の用例は「狭衣物語」にも見られ、当時の読者は、この語から「源氏物語」「狭衣物語」をすぐに想起したことであろう。「源氏物語」では、次のように書かれている。

夜となれば、人に見つけられず、出でて行くべき方を思ひまう

けつつ、寝られぬままに、ここちもあしく、皆違ひにたり。明け

たてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりも程なきここちす。

末尾の歌と係わる「源氏物語」の本文は、

誦經の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したま

へり。

鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世尽きぬと君に伝へよとなつてゐる。

このように見れば「源氏物語」を踏まえる二つの語句にはさまれた先の箇所は、通常の時間の流れを叙した情景描写というにとどまらず、意図的に、物語的雰囲気濃厚に漂わせた場面であると知られるであろう。作者である中務内侍は、ここで、浮舟の目を借りた語り手を登場させているわけで、「末の露、本の雫に」から「人間の八苦なるぞあさましき」までの部分の感懐も、作者の生の感想とばかりは言えなくなる。

「十五夜の月も雪うち散りて、風も冷やかなる枯野の庭の気色、物あはれなれど、同じ心に見る人もなし、ひとり眺めんもすきずきしかりぬべければ」の感想も、作者が浮舟の目（いわば「末期の目」）を借りて庭を眺めていた、と解する方が、自然になるし、さてこそ、

「同じ心に見る人もなし」の挿入部分のつぶやきが生きてこよう。

中務内侍のように文学趣味にとつぷりと漬かった同僚女房は、当時としても、それほど多くはなかつたのであろう。「すさまじき物とかや言ひふるすなる、師走の月夜なれど、宮の中はみな白妙に見えたりて、木々の梢は花かと思ゆ。池の鏡も戯れたるに、枯蘆のはかなくしほれ伏したる程、よろづに見所あり」の文言も、岩佐氏の周到な注釈が役に立つ。「世にはすさまじき物と言ひ古したる師走の月も」「狭衣物語二」源氏物語、更級日記等にも例がある。——その源氏の例は、「雪のかきくらし降る日、終日にながめ暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる師走の月夜の、曇りなくさし出でたるを、簾巻き上げて見たまへば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばたてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」（総角）等であつて、師走の月夜の情趣を、「中務内侍日記」の語り手は、蕉の目を借りても眺めていたであろう。

「しばしは猶端を開けて、暗れ曇る空をながめて、何となく物語どもするに」の箇所を、岩佐氏は、「おしやべりをしているうちに。次の詠から見て、源氏物語などの品評に熱中していたか」とされる。すぐれた読みであると思われる。このように見てくれば、所謂「序」にあたる部分と、最初の段とは、微妙に連続しており、日記の語り手は、物語的情趣に没り、物語の登場人物の目を借りて、景物や出来事を見ているわけで、池田亀鑑氏のように、そこに深刻な「人類永劫の悩み」を読みとつたり、玉井幸助氏のように「歴史を超越した永遠の人生における苦悩」を讀んだりするのは、素朴にすぎる読みかたとならう。

「うたたね」の場合

またしても引用が長くなるが、例示の箇所を明らかにするために、そのまま引いてみたい。

帰ってもいと苦しければ、うち休みたる程、御文とて取り入れたるも、胸うち騒ぎて引きひろげたれば、ただ今の空のはれに、日頃の怠りをとりに添へて、こまやかに書きなされたる、墨つき筆の流れもいと見所あれど、例のなかなかき乱す心迷ひに、言の葉のつづきも見えずなりぬれば、御返りもいかが聞えけん。名残もいと心細くて、この文をつくづくと見るにも、日頃のつらさは皆忘れぬるも、人わろき心のほどやと、またうち置かれて

これやさば問ふにつらきのかずかずに涙を添ふる水茎の跡
例の人知れず、中道近き空にだにたどしき夕闇に、契り違へぬしるべばかりにて、尽きせず夢の心地するにも、出で聞えん方なければ、ただ言ひ知らぬ涙のみむせかへりたる。

暁にもなりぬ。枕に近き鐘の音もただ今の命を限る心地して、われにもあらず起き別れにし袖の露、いとどこかこちがましくて、君や来しとも思ひ分かれぬ中道に、例の頼もし人にてすべり出でぬるも、かへすがへす夢の心地なんしける。

かの所には、むめ北の方、月ごろわづらひ給ひけるが、つひに消え果て給ひにければ、そのほどのまぎれにや、又程経るもことわりながら、言ひしに違ふつらさはしも、ありしにまさる心地するは、いかにおぼし惑ふらんと、とりわきたりける御思ひの名残も、いと苦しく推し量り聞ゆれど、あはれ知る心の程、なかなか聞えん方なくて日数経るいぶせさを、離れ離れぞおどろかし給ひ

つる。「つれなき世のあはれさもみづから聞え合はせたく」などあれば、例のうち寝る程の鐘の響きに、人知れず頼みをかくるも、思へばあさましく、世の常ならずあだなる身の行くへ、つひに

かになり果てんとすらんと、心細く思ひつづくるにも、ありしなごらの心ならましければ、浮きたる身の咎もかうまでは思ひ知らずぞ過ぎなましなど思ひつづくるに、今更身の憂さもやる方なく悲しければ、今宵はつれなくて止みなましなど思ひ乱るに、例の待つ程過ぎぬるはいかなるにかと、さすが目も合はずみじろき臥したるに、かの小さき童にや、忍びやかにうち敲くを聞きつけたるには、かしこく思ひ静めつる心もいかになりぬるにか、やをらすべり出でぬるもわれながらうとましきに、月もいみじくあかければ、いとほしたなき心地して、透垣の折れ残りたる隙に立ち隠るるも、かの常陸宮の御住ひ思ひ出でらるるに、入る方幕ふ人の御様ぞ事違ひておはしけれど、立ち寄る人の御面影はしも、里分かぬ光にも並びぬべき心地するは、あながちに思ひ出でられて、さすがにおぼし出づる折もやと、心をやりて思ひつづくるに、恥づかしきことも多かり。

傍線を施した「例の人しれず」云々の箇所は、「中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝のあは雪（源氏物語・若菜上）が踏まえられていよう。ここはまた、つづく若菜下の巻で、源氏が女三宮のもとを訪ねた折の有名な箇所「すこし大殿籠り入りにけるに、ひぐらしのはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たどたどしからぬほどに」とて、御衣などたてまつりなほす。「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは、憎からずかし。「その間にも」とやおぼすと、心苦しげにおぼして、立ちと

「まりたまふ」のあたりへの連想が働いていたかも知れない。踏まえてある歌は、もとより、古今六帖所載の万葉歌「夕闇は道たどたどし月待ちて帰れわがせこそその間にも見む」である。

ともあれ、「うたたね」を我々が読み進めてきて、「中道近き空にだにたどたどしき夕闇」の箇所に至れば、源氏を踏まえた物言いにくぐり気がつく筈で、いわば、源氏の注意信号が灯るのである。これは次のように言い換えてもよい。

日常的な次元での叙述がつづいているときに、源氏物語に基づく（多くの人にすぐさま了解され得る）語句（※これを私は便宜「源氏語」と称することに）が来れば、読者は、それに続く場面が、上に言う「日常的な次元での叙述」を離れて、「物語（的）場面」に転換することを了解するのである。例えば芝居の舞台で、それまでの照明の色と違った、特殊な色の照明にきり換わった途端、観客は、その場面が（回想場面等の）非現実的な場面であると直ちに理解する、といった体の仕掛けである。

福田秀一・塚本康彦両氏の「校注 中世女流日記」によれば、次の七箇所に、「源氏物語」に関連する注が付けられている。

①契り違へぬしるべばかりにて——「優婆塞が行ふ道をしるべにて来ん世も深き契り違ふな」（源氏物語・夕顔）によるか。

②枕に近き鐘の音もただ今の命を限る心地して——「鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世尽きぬと君に伝えよ」（源氏物語・浮舟）によるか。

③かの小さき童にや——この部分、和泉式部日記・冒頭部や源氏物語・空蟬を踏まえるか。

④「透垣の折れ残りたる隙に……」——「透垣の、ただ、少し折れ残

りたる隠れの方に、立ち寄り給ふに」（源氏物語・末摘花）。以下この部分、同物語同巻の一節、源氏と頭中将とがそれぞれ末摘花の邸へと忍んで張り合ふ条により、自身を末摘花に、男を光源氏に擬している。

⑤常陸宮——末摘花の亡父。彼女は故宮の遺邸にわびしく暮らしている。

⑥入る方慕ふ人の御様ぞ——「もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月」（源氏物語・末摘花、頭中将。光源氏を月にたとえている）により、頭中将のこと。

⑦里分かぬ光にも並びぬべき——「里分かぬ影をば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる」（同前、光源氏）により、光源氏のこと。

次田香澄氏校注の「うたたね全訳注（講談社学術文庫）」では、以上の指摘のほかに、①あはれ知る心——彼の悲しみを理解してのこちらの気持。「源氏物語」蜻蛉巻の小宰相の君から薫への歌「あはれ知る心は人におくれねどかずならぬ身に消えつつぞ経る——たいせつな浮舟様を失ったお悲しみに同情申し上げる心はどなたにも劣ることはございませんが、物の数にもはいらないこの身は消え入るよに過ごしております」による。阿仏の場合も、亡き北の方も愛人も、自分とは身分が違うことを強く意識しつつ、愛人の訪れのない寂しさを込めて言っている。

④が加わっている。「源氏物語」の本文を引いておけば、次のとおりである。

あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身は消えつつぞふる
かへたらば」と、ゆゑある紙に書きたり。ものあはれなる夕暮、
しめやかなるほどをいとよくおしはかりて言ひたるも、憎からず。
さらにあと一例を加え得ようか。

①ありしながらの心ならましかば——ありしながらのわが身ならましかばと、取りかへすものならねど、忍びがたければ(源氏物語・空蟬)

さて以上のように見てくれば、引用した「うたたね」の部分に、夥しい源氏からの引用があることがわかり、しかも、それらの引用は、末摘花、空蟬、小宰相といった、いわば源氏における脇役、もしくは自分の立場をわきまえて地味に振舞う人物、に身をおいての表現であると知られる。中でも小宰相の立場での物言いは、この場面では殊に重要であった。「うたたね」の語り手は、恋の相手を、すでに正妻を持った高級貴族として描き、自分をはるかに身分の劣る女として位置づけているのである。男が訪れたときの情景は、実際がどうであったかは知らず、劇的に誇張されており、ここに中世女流日記作品の特色があつた。すでに述べたように、「中道」契り違へぬ」といった語が出たとき、読者は物語的場面への導入を示す確実なサインを受け取った筈で、そこから始まる場面は、日常的な時間の枠からはずれ、男も女も、物語の主人公になった。そうした源氏語に始まる特別の場面は、「里分かぬ光」云々の源氏語の再登場で閉じられ、日記の叙述は再びもとの時間の流れに戻ったと思われる。

【とはずがたり】の場合

十日あまりのころにやまた使ひあり。「日をへだてずも申したきに、御所の御使などみあひつつ、頃とも知らずとや思し召されんと、心のほかなる日数つもる」などいはるるに、この住まひは四条大宮のすみなるが、四条表と大宮とのすみの築地、いたう崩れ

のきたるところに、さるとりといふ茨を植ゑたるが、築地の上へはひゆきて、もとの太きがただ二もとあるばかりなるを、この使見て、「ここには番の人侍るな」といふに、「さもなし」といひへば、「さてはゆゆしき御かよひ路になりぬべし」といひて、この茨のもとを刀して切りてまかりぬといへば、とは何ごとぞと思へども、必ずさしも思ひよらぬほどに、子一つばかりにもやと思ふ月かけに、妻戸を忍びてたたく人あり。

あまりに長い引用になるので、所々を引くことにする。後深草院の皇子を身籠っていた二条が、父の死の後、四条大宮の乳母の家に滞在していたときの出来事である。雪の曙から手紙が届いた。御所の御使などみあひつつ、頃とも知らずとや思し召されん」云々の箇所は、次田香澄氏のご指摘のとおり、「源氏物語」浮舟の巻を踏まえた表現であろう。すなわち蕉の歌「波越ゆるころとも知らずで末の松待つらむとのみ思ひけるかな」を踏まえて、「毎日でもお手紙を差し上げたいが、御所様からの御使いなどどぶつかつて、「あだし心を持つているとも知らないで」などと、院が思し召されはしないかと、心ならずも日数が積もることです」の意で(次田氏注釈)、雪の曙は、ここで自分を匂宮によそえ、二条を浮舟によそえている、源氏語を用いたこのサインにより、以後の叙述の劇的な転調が可能となった。茨の挿話は言うまでもなく「伊勢物語」第五段を踏まえているが、これらの出来事が事実であったか否かは、この際問題でない。男が、危険を冒してまで、禁じられた恋の相手のもとに通つて来る、そういつたシチュエーションがここで描かれたのである。

つづく第二夜の様子は、次の如くであった。

暮るれば、今宵はいたく更かさでおはしたるさへそら恐ろしく、

はじめたることのやうに覚えて、物だにはれずながら、めのと
の入道なども、出家の後は千本の聖のもとにのみ住まひたれば、
いとど立ちまじるをのこ子もなきに、今宵しも「めづらしく里
したるに」などいひて来たり。乳母子どももつどひみてひしめく
も、いとどむつかしきに、御ははにてありしものは、さしもの古
宮の御所にて生ひ出でたるものともなく、むげに用意なくひた騒
ぎに、今姫君が母代ているがわびしくて、いかなることかと思
へども、「かかると人の」などいひ知らすべきならねば、火などもと
さで、月影見るよしして、寝所にこの人をばおきて、障子の口な
る炭櫃によりかかりてゐるところへ、御ははこそ出できたれ。

あなかなしと思ふほどに、「秋の夜長く侍る。彈琴などして遊ば
せ侍らんと御て申す。入らせ給へ」と、訴訟がほになりかへり
ていふさまだに、いとむつかしきに、「何ごとかせまし。誰がし候
ふ、彼も候ふ」など、継子・実の子が名のり言ひつづけ、九獻の
式おこなふべきこと、いししい伊予の湯桁とかや、かぞへるたる
もかなしきに、「心地わびしき」などもてなしてゐたれば、「例の、
わらはが申すことをば御耳に入らず」とて立ちぬ。なまさかしく、
女子をば近くをにやいひならはして、常のる所も庭つづきなるに、
さまさまのことも聞ゆるありさまは、夕顔のやどりに踏みとど
ろかしけん唐臼の音をこそ聞かめと覚えて、いとくちをし。

とかくのあらましごとくも、まねばんもなかなかにて漏らしぬる
も、念なくときへ覚え侍れども、ことかくもむつかしければ、と
くだに静まりなれと思ひて寝たるに、門いみじくたきたて来る人
あり。誰ならんと思へば仲頼なり。「陪膳おそくて」などいひて、
「さてこの大宮のすみに、故ある八葉の車立ちたるを、うち寄

りてみれば、車の中に供の人は一はた寝たり。とほに牛はつなぎ
てありつる。いづくへ行きたる人の車ぞ」といふ。

あなさましと聞くほどに、例の御はは、「いかなる人ぞと人し
て見せよ」といふ。御ててが声にて、「何しにか見せける。人の上
ならんによしなし。また御里のひまをうかがひて、忍びつつ入
りおはしたる人もあらば、築地のくづれより、うちも寝ななんと
てもやあるらん。ふところのうちなるだに、高きもいやしきも、
女はうしろめたなし」などいへば、また御はは、「あなまがまし。
誰か参り候はん。御幸ならば、また何ゆゑか忍び給はん」などい
ふもこもとに聞ゆ。「六位宿世とやとがめられん」と、御ははな
る人いはるるぞわびしき。

右の箇所にも多くの古典作品がちりばめられている。詳しくは諸
注釈書にあたられたいが、「今姫君が母代ているがわびしくて」等
が「狭衣物語」に基づく表現であり、乳母の夫仲綱の会話の中には、
前出の「伊勢物語」第五段が登場するなど、引用された作品も多様
である。但し、これらの引用は単にレトリックの問題にとどまらな
いこと、もはや言うまでもない。場面の物語的展開を用意する作者
の技巧と見るべきである。

『源氏物語』からの引用に限って更に詳しく見てみよう。

①伊予の湯桁とかや——「空蟬」

②夕顔のやどりに踏みとどろかしけん唐臼の音——「夕顔」

③六位宿世とやとがめられん——「少女」

④の「六位宿世」云々の発言の主については、別稿で、これが雪
の曙の言葉であり、諸注釈書に見られる「御ははなる人いはるる」
が、「こなる人いはるる」の誤りであることを指摘した(注1)。

さて、中世後期以来盛行した『源氏小鏡』は、周知の如く源氏の梗概書であり、同時に連歌のための指導書でもあったが、その『源氏小鏡』には、物語のダイジェストの中に、右の三つの箇所を次のように書きとめてある。

①かの小君をしるべにて、のぞき給ふに、かしこに、継娘の、西の御方といひて、碁打ちてあり。

②かの小家に、とまり給ふに、隣の家に、目さまして、聞き知らず、かたはらいたき物語などする。(ぬかつく 隣にてつくから白のことなり)

③又、この人のこと、六位宿世といふことの侍りし。何事かとあらがふべからず。(以下略)

先に出た「浮舟」の箇所については、「源氏小鏡」は、「聞き明らかめ、大将の御方より、かの宮の御ことを恨みて、波越ゆるころとも知らで末の松まつらんとのみ思ひけるかなと宇治へ、のたまひおこしたりけり。ことあらはれぬと、思ひ嘆くさま、いと苦し」と略述している。

以上に見たように、「とはすがたり」の右の場面に引かれた源氏の文、または語句は、いずれも極めて名だかい、また印象的な、文または語句であつて、「とはすがたり」の書かれた当時の読者ならば、それぞれの語句からすぐに、源氏のストーリーを思い浮かべたに違いない。

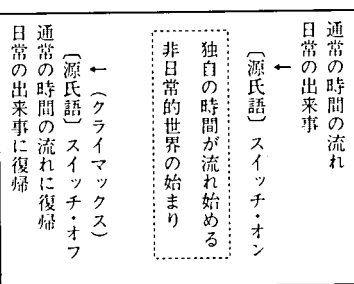
おわりに

これまで、一般に、中世の女流日記作品は、平安時代のそれに比べて、自照性が希薄になり、記録性が濃厚になって、興趣の少ない

ものになった、と思われていた。だが、以上に見てきたように、少し立ち入って調べてみれば、中世女流日記が「源氏物語」等を積極的に利用して、独自の表現をつくりあげていた事実が知られるのである。「中務内侍日記」の語り手は、浮舟の目を借り、いわば仮想された「末期の目」をもって、情景を描写し、心境を述べていた。また「うたたね」の語り手は、小宰相の君や末摘花の立場に身を置いて、わが身には及びもつかぬ高貴な恋人との交渉を描いてみせた。「とはすがたり」の語り手は、浮舟の立場に立つて、院と雪の曙との、二人の男性の間で揺れ動く自分を語り、さらに、がさつな乳母の家に愛人を迎えた戸惑いを、夕顔の立場で表してみせた。

以上のような、中世女流日記作品の表現上の特色は、作者が物語の登場人物に自分をよそえて、自己表現をしたとも見られるし、語り手が、物語の登場人物を演じてみせた、とも受け取れよう。中世女流日記作品の読者の多くは、作品の表現に、作者の生の声を聞くとともに、語り手の演じてみせる役割を楽しんでもいたろう。そういう作品を作るのが、日記作者の腕前であつた。

最後に本稿で述べた中世女流日記作品における技巧のさまを、図示しておくことにする。個々の作品のより細かな検証は次の課題になろう。



注1「とはすがたり」と宮廷社会——歴史的背景——『女流日記文学講座』第五卷・平成二年五月勉誠社刊——広島大学文学部教授——